

CLC からしだね書店便り

2025 September

no.57

* 今月のご案内 *

- ① 連載「歴史と対話し歴史に学ぶ」第9回
- ② いのちのことは社 オリーブス おすすめ情報
- ③ 読書感想本 歌集『小さな抵抗 — 殺戮を拒んだ日本兵』
- ④ 「私の家族の小さな戦争体験」 — 戦後 80 年 — 店長 坂岡 恵

CLC からしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。ドリンクを片手に、本をお楽しみください。
- ⑤ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑥ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。



CLC からしだね書店 & カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00 (※祝日も営業)
定休日 日曜日と年末年始
毎月第3木曜日は書店のみ営業

	特性	働き	Iヨハネ2:16との関連
物質の秩序	感覚	習慣 想像力 自動機械	肉の欲(欲情)
精神の秩序	思考	理性 推論 証明	目の欲(好奇心)
愛(心)の秩序	愛・信仰	直観 心の暖め 謙り	生のおごり(傲慢)

「自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、パスカルから見たデカルト的立場です。この立場だと何故イエスが十字架に架かったのが充分に理解できない。普通、神ならば栄光ある姿が相応しいと考えます。しかし、神はイエスの十字架にお

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。

「神を知らずに自己の悲惨さを知らずに神を知ること、傲慢を生む」というのは、最近よくも分かってきました。



「考える葦」から出発したパスカルが「隠れた神」においていかに神の愛を見出したかを考えます。

森下有一(高1)

この前おじさんから、パスカルの「考える葦」の出発点は、思考一般ではなく、自身の悲惨さ、特に死においてきままる孤独を逃げるに考えることだと、聞きました。ところが「パンセ」を読み返してみると、後半部分に「考えること(思考)」があまり出てこないように感じました。

山田はじめ(三ツ)

パスカルは、物質、精神、愛という三つの秩序を考えています。(表参照) 思考は精神の秩序に関わります。自身自身を知ること、特に無限大と無限小の間にある奇麗な自己を知ること、そして最終的にひとり死んでいかねばならない自己を知ること、思考によって開かれていきます。その思考を妨げるのが悲惨さを忘れるようにする気晴らしで、物質の秩序に属します。思考は逆に自己の悲惨さを徹底的に知ることへと導きます。もう一つ重要なことは思考がたどる順序です。自己の悲惨さを知り、次いで創造者なる神、そして自己の目的を知ること、この順序を示すまでが思考、理性の役割です。

有一

一つ気になったのは、同時代の、「私は考える、それ故私は存在する」と言ったデカルトとの関係です。デカルトはパスカル以上に思考を大切にしていたのではないですか？

はじめ

僕はデカルトを殆ど知らないのですが、パスカルがデカルトをどのように捉えていたかだけを記します。自己を知ることとは

思考によって始まりますが、理性によって神の存在を証明できないし、知ることでもできないと考えています。彼はこう言っています。「理性の最後の一步は自分を超越するものが無限にあることを認めることである。」(二八八以下ラフマ版番号) 神の事柄は愛の秩序に属しますが、理性によつてはそれを究めることはできません。理性に関わる精神の秩序と愛の秩序には無限の隔たりが存在するのに、デカルトは精神と愛の秩序を理性によつて一元的に捉えようとしている、とパスカルは批判します。デカルトは頭で神を考えたいけれども、パスカルは自己の病氣や悲惨さに「呻きながら」神を探究しました。この点が大きな違いだと思います。

有一

かあさんは僕に自分の内面的なことは話してくれたことがありません。おじさんによれば、手術の前頃熱心に『パンセ』を読んでいたそうですが、どこに惹かれていたのでしょうか？

はじめ

「心安らかにしないで。私「イエス」を見出していなかったら、あなたは私を求めないだろう」(九一九) という言葉が励ましになったと言っていました。

晴子姉さんは理想を求める人です。しかし学生時代、自分の経験やドストエフスキーを読む中、その理想主義が崩れていくことに悩んでいました。病氣のこともありました。そのような中で、パスカルを通じ、自分には恵に傾く性質(四二二)があることを強く感じていったようです。パスカルは「わたしには、自分の中にひそむ傲慢と好奇心と欲情の深淵が見える」(九一九)と書いていますが「よく分かる」と言っていました。「神が「人の心」を「神へと」傾けてくださるならば、信仰は決して

9月におすすめ新商品のご紹介!

切り取ってPOPとしてもご使用いただけます

なぜって味わう 生き方が変わる キリストのことば

イエス様が語られたみことば100選!
そのみことばたちをたっぷりと味わう
ためのなぞり書き聖句ノートです。

日付記入欄

聖書箇所

〈原寸大〉



なぜって書き第3弾!
毎日の生き方が
変わる聖句です

聖書協会
共同訳

推しpoint

イエス・キリストの言葉を100聖句集めた、なぜって書きノートです。ペン字で美文字練習をしながら、心に響く聖書のメッセージに自然と触れられ、信仰の有無を問わず、日々のキリストのことばの積み重ねが生き方を見つめ直すきっかけとなれどと願っています。 デザイナー Kより

なぜって味わう 生き方が変わる
キリストのことば

500105 ¥1,000 税込

■サイズ／B5判(タテ25.7×ヨコ18.2cm)
■本文64頁
■約100聖句
■日本製

中谷博幸(なかつにひろゆき)

1953年奈良県生まれ。香川大学名誉教授。主な研究対象はヨーロッパ文化史、特にドイツ近世キリスト教文化。



みとこの孤独とを忍ばれる。…この時には、あまりの痛みにもう耐えきれなくなったかのように、呻かれる。『わたしは死ぬばかりに悲しい』

パスカルは自分以上に孤独であったイエスを見出します。そして、次のような彼に対するイエスの語りかけを心の底で聞きます。

「わたしは、最後の苦悶の中でも、あなたのことを考えていた。あなたのために、こんなにも血を流した。」

こうも記しています。「かれはわたしのために罪となられた。あなた『神』のくだされる災いはすべて、かれの上に降りかかった。」「メモリアル」では、「かれを避け、かれを捨て、かれを十字架につけたのだ」と告白しています。同時に、「よるこび、よるこび、よるこび、よるこびの涙」とも記しています。教えられるのではなく心が暖められることによって与えられる信仰が脈打っています。(二五八)

「考える葦」から出発したパスカルが、その孤独・悲惨の克服を、十字架の死において隠れておられるイエスにおいて見出しました。「わたしたちは、イエス・キリストにおいてしか、生も死も知らない。」(四一七) パスカルは、わたしではなく、わたしたちという複数形を使っています。それは、「わたしたち」が孤独な存在ではなく、イエスにおいて有機的に結ばれ

た存在となっているからです。

有..

「ここで『考える葦』から『考える肢体』へとつながるわけですね。この前おじさんに言われてから、『考える肢体』の箇所を抜き書きしました。たとえば、

自己愛を正しく律するためには「考える肢体に満ちたひとつのからだを思い浮かべてみるべきである」(二六八)

「肢体である」ということは、ただからだの霊によつてのみ、また、からだのためにのみ、生命を持ち、働きを持っていることである。」(三三九)

はじめ..

からだを離れた肢体は、ひとり宇宙に放り出され、死においてひとりである「考える葦」だけれども、「キリストのからだの肢体」(「リント」二章)につながるることによって「考える肢体」となり、自己愛もキリストと他者に向かうこととなる、というのが『パンセ』の結論だと思えます。しかし、この「考える肢体」という思想は充分には展開されませんでした。あまりにも早く死がおとすれました。

有..

この次は、かあさんがドストエフスキーになぜ惹かれていたのかを、おじさんからじっくり聞きたいと思います。(続く)

9月新入荷

デイリーブレッド&まきばのこひつじ 食器シリーズ

デイリーブレッド

マタイ6:11(英語)のみことば入り!
ゆるくてかわいい最後の晚餐と羊飼イエスのイラストです。

A 500113 プレート ¥1,630 税込
■サイズ/高さ 26×直径 21cm
■材質/PET、ウレタン塗装(抗菌加工) ■食洗機対応 ■日本製

B 500111 スープマグ ¥1,400 税込
■サイズ/高さ 6.5×直径 12cm ■容量/420ml
■材質/PET、ウレタン塗装(抗菌加工) ■食洗機対応 ■日本製

C 500112 サラダボウル ¥1,200 税込
■サイズ/高さ 5.6×直径 13.3cm ■容量/500ml
■材質/PET、ウレタン塗装(抗菌加工) ■食洗機対応 ■日本製

まきばのこひつじ
The LORD is my Shepherdのみことば入り!
明るい色合いに素朴な羊柄で子どもにピッタリなシリーズです。

A 500108 お椀 ¥1,080 税込
■サイズ/高さ 5.8×直径 10cm ■容量/270ml
■材質/PET、ウレタン塗装(抗菌加工) ■食洗機対応 ■日本製

B 500106 マグ ¥1,200 税込
■サイズ/高さ 7×直径 7.8cm ■容量/230ml
■材質/PET、ウレタン塗装(抗菌加工) ■食洗機対応 ■日本製

C 500107 プレート ¥1,680 税込
■サイズ/長さ 14cm ■材質/ステンレス
■食洗機対応 ■日本製

D 500109 スプーン ¥440 税込
■サイズ/長さ 14cm ■材質/ステンレス
■食洗機対応 ■日本製

E 500110 フォーク ¥440 税込
■サイズ/長さ 14cm ■材質/ステンレス
■食洗機対応 ■日本製

推しpoint
ゆるカワイイラストで大人も子どもも親しまれる食器シリーズ!
最後の晚餐はオリジナルイラストです。 デザイナーMより

入荷済

キャレなお箸

おしゃれなパッケージでギフトにおすすめ!

ピンク 500117
グリーン 500118
ブルー 500119

キャレ(carre)とはフランス語で四角いという意味。その名の通り四角くて持ちやすいお箸です!

各 ¥1,320 税込

■1コリント 13:4(リビングバイブル)
■サイズ/全長: 23cm
■材質/A S樹脂、アクリルウレタン塗装
■食洗機対応 ■日本製

※電子レンジ、オーブン等での使用はしないでください

推しpoint
彩度を抑えたすみカラーでおしゃれ。手になじみ、転がりにくく、使いやすいです。デザイナーTより

入荷済

新作 巻き型聖書カバー ねこ&ツバキ

大人っぽい猫柄と和モダンでおしゃれな椿柄が新登場!

ねこ
〈柄拡大〉
〈中面〉
〈留め具付き〉

ツバキ
〈柄拡大〉
〈中面〉
〈留め具付き〉

聖書カバー 巻き型 ねこ
500270 大型用(A5) ¥4,900 税込
500271 中型用(B6) ¥4,400 税込
500272 小型用(A6) ¥3,740 税込

聖書カバー 巻き型 ツバキ
500273 大型用(A5) ¥4,900 税込
500274 中型用(B6) ¥4,400 税込
500275 小型用(A6) ¥3,740 税込

■材質/表面: 綿、裏地: PVC、背・ベルト: 牛革 ■日本製

推しpoint
表地は手触りの良い布、内側には革のような風合いのPVCを使用しています。合皮や本革と違い、表面が剥げにくく、長く美しくお使いいただけるのが魅力です。 デザイナーYより

入荷済

くるくるボールペン イエス・キリストのことば

もらって嬉しい、楽しい仕掛けボールペンです

イエス・キリストの5つの聖句が登場! プレゼントにもぜひ!

500217 ¥840 税込

■マタイ 5:39・44、マタイ 7:7、ヨハネ 14:1・27
■聖書協会共同訳 ■サイズ/全長 14.8×直径 1cm
■材質/プラスチック ■インク色/黒 ■日本製

推しpoint
使うたびにセリフが変わるから、同じボールペンでも気分を変えて楽しめます。 デザイナーYより

聖書協会 共同訳

歌集『小さな抵抗——殺戮を拒んだ日本兵』

渡辺良三著 岩波現代文庫 980円＋税



「殺すな 言えなかった『罪』」。新聞にこんな見出しが載っていた。気になって読んでみると、戦争中、出征した中国のある村で、度胸をつける訓練と称して、中国人捕虜を刺突（銃剣で突き刺す）よう上官に命令されながら、ギリギリのところでこれを拒否した一人の元兵士の話だった。お名前が渡部良三さん。上官に命令された兵士たちは、まだ若い捕虜たちを順番に突き刺していく。「次第に血か肉か衣服かも分からなくなり、最後は足蹴にされて穴に放り込まれる。2人目3人目と凄惨な姿で穴に消えていく」。そして、「5人目の捕虜を最初に突き刺すのが自分だと分か」って、渡部さんは激しい葛藤を覚える。が、ついにこれを拒否した。その後彼は、命令に逆らったと凄惨なリンチを受けることに。ギリギリのところまで命令に逆らう。そうさせたのは、「祈り」だったという。出征の時、熱心なキリスト教徒だった父親から言われたひとこと——「自分の言葉でいいから祈れ」を思い出した。父親の影響で自分も信仰の道に入ったという渡部さんは、思わず祈った。そして「神の声」を聞いたという。

鳴りとよむ大なる者の声きこゆ

「虐殺こぼれ生命を賭けよ」

後に、渡部さんはこの短歌を残している。
ただ、渡部さんは、自分が直接手を下すことはなかったものの、「殺すな」と言えなかったことを悔い、復員後も、生涯自責の念に駆られつつ生きたそうだ。戦争の時代を生き、様々な理不尽と極限状態を経験された渡部さんは、2014年、92歳で亡くなられた。しかし、彼はその当時のご自身の葛藤や叫びを、大量の短歌にして残しておられた。苦勞して戦地から持ち帰ったそれらをもとに、渡部さん自身の講演記録なども含めて出版されたのが本書である。

小さな——とタイトルにあるが、決して小さな抵抗とは思えない。

朝飯を食みつつ助教は論したり

「捕虜突殺し肝玉をもて」

いのちをわず八路の捕虜は塚穴の

ふちに立ちたりすと無言に

屍は素掘りの穴に蹴込まれぬ

血の跡踏し祈るものなく

縛足の女は捕虜のいのちをえり

母なるうし地にひれ伏して

祈れども踏むべき道はただひとつ

殺さぬことと心決めたり

虐殺の場面では、こうした歌が次々と綴られる。

歌集の中には、さらに、「拷問を見る」「戦友逃亡」「リンチ」「教練と生活」など、戦地でのそれぞれのエピソードが生々しく歌で綴られている。読み進むほどに、息苦しくなる。けれども、なぜかそこから逃げられなくなるような気がする。何かが読む者を離さない。目をそらしてはいけないのだと迫ってくる。

言葉を超えた情念のようなものが伝わってくるのは、短歌という手法が効いているのかもしれない。あたかも低温火傷のように、ひりひりと心に残ってしまう。

本書の中の講演記録には、渡部さんが父親から言われたこんな言葉が記されている。

「信仰も思想も良心も、行動しなければ先細りになるばかりだぞ……」。行動しなければ、先細りになる。この言葉は、極限状態の渡部さんの心を最後のところで鼓舞したようだが、これは、今を生きる私たちにもずしんとこたえる。

渡部さんは、中央大学在学中、学徒出陣で出征した。多くの理不尽を体験し、不条理を見て来た。それらも短歌で綴っている。そのなかには、天皇や為政者の戦争責任をキツパリと糾弾しているものもある。

国内を廻りて止まぬ天皇に

開戦責任國民は問わざり

戦争の責任ほかされて歪みゆく

時代の流れを正すすべなし

天皇の戦争責任なしとうは

アジアの民族の容れぬことなり

年旧も戦争の責任は否まずに

負うべき在り処踏みてゆかまし

あの時代を生きた方の厳しさだろうか。決して忘れてはならないものがあることを知らされる。

【書店員た】

戦後80年。第二次世界大戦を体験した人達が、どんどん少なくなり、埋もれている戦争体験者の証言を残さなければならぬという切羽詰まった声を聞くようになりました。今、世界を見渡しても、日本の社会を見渡しても、かつての「戦前」を思わせるような空気を感ずります。

世界は国単位の政治力学の均衡の上に成り立ち動いているのだから、政治家が「自分の国」の「今」の利益を考えて動くのは当然のことだと思えます。けれども、その前提として、私たちの子や孫やひ孫や、もつと先の孫たちが暮らす世界を想像しているのか？未来の世界を生きている私たちの子孫が、世界のあちこちに散って行ったとしても、そこで幸せに暮らしてほしいという願いをもって、今の政治に携わっているのか？アメリカファーストだとか日本人ファーストだとか、世界のあちこちで言い始めているますが、その根底にあるのは、じつは「現世代ファースト」であり「私ファースト」だという気がしてなりません。自分たちがいなくなった世界を生きる人たちのために、なすべき事をちゃんと考えたい、「現世代」の一員として、微力ながらもその務めを果たしたいと願っています。

さて、戦争体験者の証言に、話を戻します。

私の親や祖父は、直接、兵隊にとられた人も、空襲で逃げ惑った体験をした人もいません。けれども、戦争という陰鬱な空気のなかで、その心中がどうだったのかもつとちゃんと聞いておけばよかったと、今頃になって後悔しています。私が聞いた「ナマ」の話は、ほんのわずかな日常の話ですが、記録しておきたいと思います。

私の家族の小さな戦争体験

店長 坂岡 恵

けどな。近所の人らは、大事なもんとか高価なもんは、だいたい隠してはったみたいや。私が食べもんの配給当番の時は、『公平に分けてくれる三島はん(祖母のこと)が当番でよかったわあ』って言われたもんや」とちよつと自慢げ。

根が生真面目で優等生気質の祖母らしいエピソードです。

《祖母の長女、伯母の話》

「あの頃は、みんなおなか空いてしゃあないし、『今日食べるもんはこれだけしかない。晩まで我慢しよう』ってお母さんは言うんやけど、私ら子どもは我慢できひん。『ええやん、いま、食べよう』って言うやろ。そしたらお母さんも『そうやなあ、食べよか』って、朝のうちにその日の分を全部食べてしもた」

どこか太らかだった祖母らしいエピソードです。

《祖母の話②》

「あの頃は、この家も、庭に花植えるより、なんかしら食べられる野菜やらお芋やらを植えてた。庭の力ボチャが一つ、だんだん大きくなってきてな、子どもらは『もうええやん、早よ食べよ』って言うんやけど、私は欲が出て、『いや、もう一日だけ待とう。ちよつとでも大きくなってから食べよう』って言うて、子どもらに我慢させたんや。ほんで次の日の朝いちばんに庭に行ったら、カボチャが無くなって。夜のうちに盗られてた。子どもらはみんな泣いて怒った。『昨日、食べたやつよかったんや！』言うてな。そやけどな、庭に小さい子どもの草履がひとつ、落ちてたんや。『子どもをおんぶして、泥棒はったんやろかなあ。子どもは力ボチャをおなかいっぱい食べられたかいなあ』て私が言ったら、『なに言うてんねん！お母さんはアホや！』って子どもらに責め立てられた」

《父の話》 父は昭和7年(1932年)生まれでした。終戦を迎えたのは、13歳のときです。

私「戦争の時、どんなことを考えてた？」

父「鯖を一匹、丸ごと食べたいと、ずつつと思ってた」

鯖が御馳走だったのか、鯖が大好物だったのか、いずれにせよなんとさやかな、でも立派な叶うことのない贅沢過ぎる願い事だったのでしょうか。

私「兵隊さんになって、お国のために尽くしたいと思った？」

父「いや。そら、恐い戦争になんか行きたなかったわ。軍隊は恐ろしいとこやって聞いてたしな。そやけど、もうすぐ兵隊にとられるんやろなあ、泳げへんさかい、海軍だけは行きたいなあ、思ってた」

なんでも、海軍に入ると、「海に放り込まれて、溺れながら泳ぎを覚えさせられる」という噂を聞いたのだそうです。父の口ぶりからは、お国のため、天皇陛下のために命を捧げるぞ、というような情熱はほとんど感じられず、それよりも今の空腹と、これから放り込まれる軍隊でやっていけそうにない自分への不安と恐怖、そして、逃れられない運命に抗えないあきらめのようなものを感じました。

《父の母、つまり私の祖母の話①》 戦中、祖母は1男4女の母で、未亡人でした。

私「一人息子を、お国のために兵隊にしたかった？」

祖母「うーん……(と、しばし考えてから) お国のために捧げなあかんとは思ってた。そやけど、やっぱりなあ……。私は、お国のために金属を供出しろ言われたら、歯の詰め物まで全部出すくらいの軍国婦人やった

お人よしな祖母ですが、まだ、お人よしなことを言っていられるような状況だったのかもしれない。

《祖母の話③》

「ある時、『裏の山に、敵兵の飛行機が落ちた！』って、近所が騒がしい。私も走って見に行ったら、そしたら戦闘機の横で白人の兵隊さんが、頭から血い流して座ってはる。見たら、まだ少年みたいな顔してはるね。近所の人らは、遠巻きにして警察が来るのを待ってはった。『ああ、この子にも、国で待てるお母さんがいるやろうなあ』て思ったら、いても立つてもいらんようになって、家まで走って行って、うちの子どもらに何かあった時のために大事にとった薬と包帯と持って引き返した。ほんで血い流してる兵隊さんの頭にありったけのヨードチンキ振りかけて、傷口をきつう包帯でしばった。その兵隊さんはそれから警察に連れて行かれてしもて、どうなったかはわからん」

あの時代、私の家族のように、運よく、かろうじて悲惨で残酷な体験を免れ、戦争で家族を失うことがなかった人達もいました。それでもあの時代のことを積極的に話すことはあまりなかったように思います。もしかすると、自由にものが言えず、自分の命も人の命も大事にしてはいけなかった世代、そして食べる物もなくおしゃれも禁止された世代にしかわからない、後ろめたい体験や思いが隠れているのかもしれないあと、その世代に育てられた私は思っています。

祖母が、かばちゃ泥棒や敵兵の「親の気持ち」と、自分自身の「親の気持ち」を重ね合わせる「想像力」を手放さずに生きてくれたこと、それは私のささやかな誇りであり、受け継ぐべき遺産であると、心の中で小さく手を合わせています。

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。)

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌、自分史・教会の記念誌などは受け付けておりません

【本の送り先】

住所: 〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先: CLC からしだね書店 献本係 電話: 075-574-1001 FAX: 075-574-0025
Mail: clc@karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

小島徳道様、安田正人様
宇治福音自由教会様、
匿名様(順不同)

8月の古書の収益は51,102円でした。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきますと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集を終えて...

◆戦後80年。書店のある京都は大空襲なく終戦を迎えました。けれども、かつて京都が原爆投下の候補地だったことは、忘れてはいけなと思っています。◆まだまだ暑い中、来年のカレンダーや手帳のご案内をする時期になりました。数には限りがありますので、確実にお手元にお届けするためにも、申し込みはなるべく早くお願いいたします。

【店長】

CLCからしだね
地下古書店から

新古車という言葉があります。新車なのに中古市場で販売されている車です。実は新しい本も地下古書店で中古として販売しています。

大きな声では言えないのですが、1階の書籍販売されているものがここでは安く買えます(ここだけの話です)。きれいな新品のものは1階で、ちょっと線があったり、ほんの少し使用感があってもいい場合は地下にお越しください。現在、本を読む人が少なくなっているため、出版社は発行部数を少なくして本の種類を増やして発行しています。人との出会い、そして、本との出会いは大切です。よい出会いがありますように!(水野)

からしだね館3階の茶室をお借りして10月より、表千家講師による茶道教室が始まります。毎月第1、2、3週の金曜午後2時~5時30分です。お問合せ、見学などは **080-3695-2142** 水野までお願い致します



森住ゆきさんカレンダー入荷!!

編集・発行: 社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
CLCからしだね書店&カフェ・トラリアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから